



「ヘドウィグ・アンド・アングリーインチ」  
 “HEDWIG AND THE ANGRY INCH” ●●● 第11回

## “It's what I have to work with.” 「わたしが折り合いをつけて いかねばならないものよ」

自由を得てロックシンガーになるため、米兵との結婚を決意し性転換手術まで受けてしまう東独の少年。ところが手術ミスで股間には「怒りの1インチ」が……。ファッションも音楽もエピソードもギラギラしながら、なかなかひたむきな映画。そして英語。

文=中野香織



ギャガ・コミュニケーションズ配給。オフ・ブロードウェイで2年半以上のロングランを記録した同名ミュージカルと同じく、ジョン・キャメロン・ミッチェルの監督・脚本・主演。1月下旬よりロードショー。

タイトルがいいですね。'Hedwig and The Angry Inch'。昨年10月に東京国際映画祭に招待作品として上映された時に駆けつけたのは、このタイトルに胸騒ぎを覚えたからでした。

ポスターには、ライオンのたてがみのような金髪にグリッター系メイクをした、ど派手な「女」の写真が映っていましたが、監督・脚本・主演をこなした才人として舞台挨拶にあらわれたジョン・キャメロン・ミッチェルは、くりくり頭の端正できゃしゃな男の子でした。38歳の男性に「男の子」とは失礼かとも思いますが、なんといってもその日のお洋服が「男の子」でしたから。襟に白いラインが入った、真っ赤なブレザー。「スコットランドのカトリック系の寄宿学校に通っていたときの制服」だそうです。「気に入っていたので、大きめに作ってもらって今も着ている」のだとか。

この制服のエピソードといい、たまたまいという話し方といい、真面目で純朴な人との印象すら受けました。映画とはといえば、けばけばしいポスター写真や胸騒ぎのタイトル、マドンナやデヴィッド・ボウイが熱狂！という前評判から短絡的に想像していたのとは違って、やはりとても真面目なのです。真摯で、ひたむき。この作者にしてこの作品があるのでしょ。

ファッションもメイクも音楽も個々のエピソードもたしかにギラギラはしていますが、映画や歌を書くテーマとはといえば、古代ギリシアの哲学者プラトンの哲学をベースにした、今どき時代遅れかもしれない「天上で完結する不変で根源的な愛」。ちなみに、現代において「プラトニック・ラブ」と呼ばれている愛の形の起源こそ、この「プラトニック・ラブ」にあります。プラトン哲学における、普遍的で完全な愛の理想形がしだいにゆるく解釈されて、現世的な肉欲を超越した関係を「プラトニック・ラブ」と呼ぶようになった次第です。ついになら、プラトンのギリシア名は「肩幅の広い人」という

意味。アメフトのショルダー・パッドや武士の袴に見られるように、広い肩幅は強い男の象徴です。マッチョほどプラトニック・ラブの信奉者が多いという俗説は、こんなところに正当な起源をもっていたようです（うそ）。

さて、テーマは古典哲学に影響を受けているものの、個々のエピソードは奇抜です。主人公ヘドウィグは、ベルリンの壁が永遠に健在であろうと思われていた1960年代後半に、自由を得たいと思ってアメリカ兵との結婚を決意します。が、その前にやらなきゃいけない手術がある。婚約者ルーサーと、ヘドウィグの母は、こんなセリフでヘドウィグにその手術をすすめます。

**Luther: To walk away, you got to leave something behind. Am I right, Mrs. Schmidt?**

(成功しようと思えば、何かをおいていかねばならない。そうですね、お母さん)

**Mom: I always thought so, Luther. To be free, one must give up a little part of oneself. And I know just the doctor to take it.**

(もちろんですとも、ルーサー。自由になるためには、自分の一部分をあきらめなきゃ。わたしが腕のいい医者を紹介するわ)

おそろしいことを話しているのにセリフはこんなにも音楽的でユーモラス。この映画の英語の特徴の一つがまさにここに現れています。悲惨な話、知的で難解な話も、音楽的でユーモラスなセリフで聞かせるのです。時には本当に歌になったり。ともあれ、性転換手術を受けますが、それが失敗してヘドウィグの股間に残るものこそ、タイトルの「怒りの1インチ」。

ジ・アングリー・インチをかかえるかぎり、彼女がプラトニックに合一すべき相手を探すのは並大抵の易しさではありません。たとえば「運命の人」と思ったトミーなどは、彼女のアングリー・インチにはじめて触れて、こんな反応をします。

**Tommy: What is that? (今のは何?)**

**Hedwig: It's what I have to work with. (わたしが折り合いをつけていかねばならないものよ)**

**Tommy: My mom's probably wondering where I am.**

(えっと、ママが心配してるから帰らなきゃ)

残酷と滑稽がせめぎあうようなこんなエピソードの間には、単純にコスプレと音楽が楽しいシーンが満載です。「ロッキー・ホラー・ショー」ばりに観客と一緒に歌うことを求められる場面もあります。ヘドウィグがスクリーンから、'Okey everybody!' (さあ、みんなも一緒に歌ってね)と誘ってきたら、観客は次のフレーズを歌わねばなりません(笑)。

**'I put on some make-up. Turn on the 8-track. I'm pulling the wig down from the shelf'**

(お化粧をして、音楽をかけたなら、かつらをつまみしょう)

ヘドウィグの髪型を模した「ヘドヘッド」をかぶって「ロッキー・ホラー」ばりの参加型観客を演ずるのもよし、古典哲学が説く愛の起源をしみみ考えるのもよし、ファッションとメイクをひたすらチェックするのもよし、ロックに身をゆだねるのもよし。「愛」と同じく人それぞれの楽しみ方の形がある映画です。